

超高齢社会に対応した白山麓地域の魅力創生戦略と若者定住計画 ～ 地域生活交通の改善と若者定住プラン ～

指導教員：金沢大学理工研究域環境デザイン学系 教授 高山 純一、准教授 中山 晶一郎
金沢星稜大学経済学部 准教授 堂下 恵

参加学生：(五十音順)

【高山ゼミ】 Ahmed Wahid Uddin・稲田裕介・今村悠太・上畑雄太郎・遠藤紀彬・岡本裕也・
中井惇弥・中野晃太・阪野俊樹・藤田雅久・道下健二・山本慎之介・楊寅・
吉村仁・渡辺拓史

【堂下ゼミ】 奥美彩子・窪田充泰・兒玉和樹・紺野螢子・高橋侑加・中谷元宣・中田智英・
中宮鳴木・西川香奈子・濱野明宏・松村直樹・宮崎裕加里・藪下幸子・綿井秋子

1. 調査研究成果要約

観光交通、生活交通それぞれの調査から、観光者行動と交通手段との因果関係を得ることができ、生活交通では、コミュニティバスの知名度が高い反面利用が少ない現状が浮き彫りとなった。

住民・大学生への白山麓への若者定住促進に関しての意向調査から、若者の移住促進には消費の場と交通の利便性が不可欠であることがわかり、地域行事や祭礼への参加姿勢が住民と学生、両者にとって望ましい隣人の判断材料になることが把握できた。

2. 調査研究の目的

石川県白山市周辺地域では、2013年に北陸道の白山IC、2015年に北陸新幹線の開通を控えており、今後の交通環境の大きな変化が予想されている。白山市は平成17年2月1日、1市2町5村（松任市、美川町、鶴来町、河内村、吉野谷村、鳥越村、尾口村、白峰村）の合併により誕生した。白山市の白山麓地域旧5村は、観光資源に大変恵まれており、年間を通じて多くの観光客が訪れている。一方この地域では、コミュニティバス「めぐーる」が運行されているが、高齢化・過疎化に起因するバス利用の減少のサービスの低下が起こっており、何らかの解決策が求められている。

そこで、本研究では白山地域における観光交通の実態調査を行い、将来の交通変化への対応を検討したい。同時に、生活交通に焦点を当て、現在の問題点の整理から、将来の交通のあり方を考えたい。同時に、過疎・高齢化への対策の一つとして白山麓地域への若者の定住促進の可能性に関して調査を行い定住化促進プラン策定のための基礎データとしたい。これらを合わせ、超高齢化社会を見据えた白山麓地域の魅力創生プロジェクトを検討したいと考える。

3. 調査研究の内容

本調査研究全体では、白山麓地域における地域公共交通の実態を明らかにし、新たな観光施策を提案するために、次に示す4つの調査を行った。

- (1) 地域住民の生活交通の実態調査 …… アンケート調査、ヒアリングによる現地調査
- (2) 白山麓地域における観光動向調査 …… アンケート調査
- (3) 若者を対象とした地域定住条件の実態調査 …… アンケート調査、現地調査
- (4) 地域行事が若者定住化に与える影響の調査 …… 現地調査、文献調査

上記のうち、高山・中山ゼミでは、(1)・(2)を担当した。

・生活交通実態調査は、コミュニティバスが運行している白山麓地域の住民を対象として買い物や通院、通勤・通学などの生活行動の現状や意識を明らかにする目的で、白山麓地域の住民にヒアリング調査と

アンケート調査を行った。ヒアリング調査は2010年8月中旬から10月中旬に行い、白山麓旧5村の集会所や支所に集まってもらった住民に、コミュニティバス「めぐー」についての意見を聞いた。白山市の職員から「めぐー」の現状の説明を受けた後に、「めぐー」の運行ルートや利便性、デマンド化、子どもの利用について住民の意見を求めた。アンケート調査は後述の堂下ゼミのアンケートと同時に地域住民宅にポスティングし、郵送による回収を行った。有効配布部数は1523部であり、有効回収部数は350部である。回収率は全体で23%であった。

・観光動向調査は、白山麓地域の観光客に対して、行動や意向の把握を行うため、アンケート調査を行った。調査期間は2010年9月に、観光拠点にて学生がアンケート調査票を観光客に直接配布、帰宅後記入してもらい、郵送によって回収する形である。回収されたものはデータ入力を行い12月までに分析を完了した。

堂下ゼミでは、(3)・(4)を分担し、若者の定住をテーマに地域や行政に求める条件の実態調査を行い、地域の魅力と若者のニーズのマッチングを図ろうと考えた。また、祭りなどの地域行事を通じて若者と地域の一体感を創出することで、地域に対する意識の向上を図り、地域定住の可能性を検討することも念頭にいた。実際の調査研究では、白山麓地域において若者定住促進についてのアンケート調査、金沢星稜大学経済学部3年生を対象としたアンケート調査、ならびに石川県立白山ろく民俗資料館主催の伝統的な焼畑に関するイベントに参加して情報収集し、若者定住促進ならびに地域イベントによる地域活性化を検討しようと試みた。

・白山麓住民を対象とした若者定住促進に関する意識調査では、アンケート2000部を高山ゼミと同時に各戸にポスティングした。回収は郵送で行い、その結果、350件の回答を得た。アンケートの質問項目は、主に図3.1のとおりである。なお、アンケートでは、若い世代を40代までの青壮年層、白山麓を旧5村と考えてもらうよう明記した。

・都市部に生活拠点を置く若者への白山麓移住に関する意識調査では、金沢星稜大学経済学部3年生を対象にアンケート調査を実施した。同学部3年生の総数は371名であり、各ゼミナールの担当教員にアンケートの配布・回収を依頼した。得られた回答は297であった。質問項目は、主に図3.2に示すものである。

白山麓住民へのアンケートと比較できるよう、同じ質問項目を複数設定するように心がけた。また、白山麓地域についてほとんど知らない学生もいると考え、アンケートの初めに白山麓についての簡単な紹介文を載せて工夫した。

- ・属性…性別、年齢、職業、居住地、家族構成
- ・若い世代が白山麓に移住してくることに賛成か反対か
- ・若い世代の移住促進のため、白山麓に必要と思われる施設
- ・移住してほしい人物像
- ・白山麓への移住を勧めるための地域の魅力は何か

図3.1 若者定住意識調査アンケート質問項目

- ・属性…性別、年齢、職業、居住地、家族構成
- ・若い世代が白山麓に移住してくることに賛成か反対か
- ・若い世代の移住促進のため、白山麓に必要と思われる施設
- ・移住してほしい人物像
- ・白山麓への移住を勧めるための地域の魅力は何か

図3.2 白山麓移住意識調査アンケート質問項目

4. 調査研究の成果

4.1 白山麓地域における生活交通の実態調査結果【高山・中山ゼミ】

先述のとおり、ヒアリング調査とアンケート調査を行った結果、ヒアリングでは住民からは「鶴来駅行きの直通ルートがほしい」「集落内に数カ所停まってくると助かる」「現行のバスよりも小さくてもよい」「デマンドバスは予約をするのが面倒くさい」などの意見が多く聴かれた。

アンケート調査では、得られた350の回答のうち、65歳以上の回答者が全体の44%あり、ついで50～64歳が32%であった。職業構成の中で最も多いのが無職の31%であり、それに次いで会社員の24.2%となっている。また、家族構成は夫婦2人が29.4%で最も多くなっている。生活交通としてのコミュニティバス「めぐー」は、住民の92.2%が知っているにも関わらず、利用したことがあるのは12.4%のみであった。利用頻度を見ても毎日の利用は少なく、週や月に数回の利用が利用者の半数を占めている。

また、利用者の中で「めぐーる」を定期的に利用している人は 11.9%であるが、1 回の外出で複数目的地に行く人は 73.2%いる。複数目的地の大半が病院と買い物であった。

「めぐーる」が運行されていない旧白峰村を除く地区では「めぐーる」の一部はデマンド運行されている。今後、運行計画見直しを経て一層デマンド化が進むものと思われる。しかし、アンケートでは住民の 81.6%はデマンド方式のバスの予約方法を知らないと答えている。ヒアリングの結果によるとデマンド化の 1 番のネックは事前予約のしにくさにあり、現システムでは前日までに予約をしなければならないが、回答者の 22.2%はせめて 3 時間前まで予約可能にして欲しいと答えている。また、デマンド化に伴う車両の小型化については、46.5%が現在の車両は大きいと答えており、小型化して集落内までバスが入れるようになった場合、31.7%が利用は増加すると答えている。

「めぐーる」の利用目的は、通院 18%、通勤・通学 21%、買い物 25%、用事 14%となっている。利用意向の高い時間帯は、行きは 8 時台が最も高く、次いで 7 時台が高くなっており、帰りは 12 時台が最も高く、15 時以降は全体的に高い値となっている。

現在運転免許を所有している人は 84.4%おり、不所持者は 14.9%である。家族のなかで運転免許を所持している人数は 2 人が最も多く 42.2%となっている。現在の交通手段を見てみると自家用車（自分で運転）が 53.1%であるのに対し、運転できなくなった場合の交通手段では公共交通機関が 52.2%と将来的な公共交通の利用意向がみてとれる。また、「めぐーる」がなくなったら困るかという質問に対しては、将来的に利用するため困る、地域の生活交通としてなくなると困るという意見がそれぞれ 30%以上あり、「めぐーる」の存続が望まれている結果となった。

4.2 観光客に対する交通流動実態調査結果【高山・中山ゼミ】

ここでは、観光客に対する動向実態アンケート調査の結果を示す。

観光での宿泊有無に関するデータ 915 件のうち、719 件(79%)が日帰りでの観光であり、宿泊は 196 件(21%)であった。旅行者の出身地は、日帰り観光客の 55%が県内からの観光、宿泊客の 96%が県外からの旅行であった。

図 4.2 は、旅行者の出身と白山麓までの代表交通手段の関係を示したものである。図中公共交通では、電車・タクシー・路線バス・送迎バス・飛行機が含まれる。図を見ると、北陸三県からの観光客では 95%の人がマイカー・バイクで訪れているのに対して、北陸以外からの観光客では、約 20%が公共交通を使って訪れていることが分かる。

白山麓までの交通手段別に刊行立ち寄り箇所を分析した。

その結果、マイカーでは白山スーパー林道(285 件)や白山比咩神社(103 件)、鳥越一向一揆歴史館(80 件)等、非常に広範囲に分布していることが分かった。またバイクもあわせ、道の駅瀬女(265 件)やしらやまん(140 件)など拠点となる場所への立ち寄りが非常に多い結果であった。一方、鉄道に着目すると、白山比咩神社(31 件)やスカイ獅子吼(7 件)など、鉄道最寄駅から歩いて行ける地域に観光が絞られる傾向が強いことが分かった。

図 4.3 は白山市に求める交通システムを示したものである。これは、「クルマを持っているので不要(692 件)」を除いたものであるため、全体としては少数な意見ではあるが、公共交通者を中心に図に示した交通システムの充実を求めている結果であった。

・定期観光バスの拠点

求める交通システムにおいて「定期観光バス(123 件)」を選択した人に対して、観光バスの発着点と

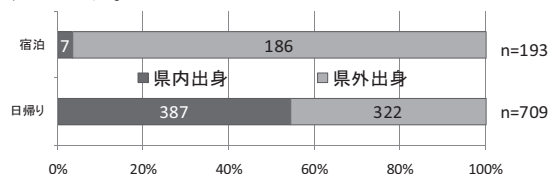


図 4.1 旅行者の出身と宿泊有無の関係

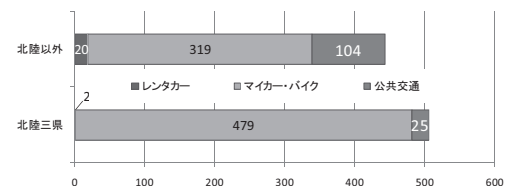


図 4.2 旅行者の出身と白山麓までの交通手段

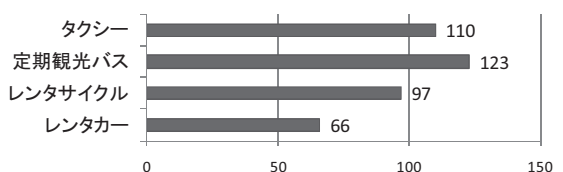


図 4.3 求める交通システム

して希望する場所を訊いた。図 4.4 は、その結果を旅行者の出身の違いで分類したものである。これを見ると、出身が県内(21 件)・県外(51 件)とも金沢駅が最も多いことが分かる。一方、次点では県内在住の旅行者が、鶴来駅(10 件)、松任駅(7 件)と答えているのに対して、県外在住の旅行者の場合、北陸本線の特急停車駅である小松駅(15 件)を挙げており、鶴来や松任と答えている割合は小さかった。

ここから、将来の北陸新幹線開業を控え白山麓への定期観光バスを企画する場合、県外からの旅行者は、新幹線停車駅である金沢駅などに定期観光バスの拠点を置くことが、利用旅客にとって都合がよくなると考えることができるのではないだろうか。

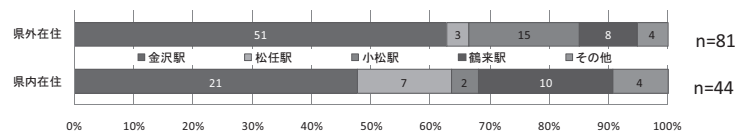


図 4.4 定期観光バス拠点の希望

4.3 白山麓住民を対象とした若者定住促進に関する意識調査の結果【堂下ゼミ】

アンケートの回答数は 350 であり、回答者の属性の特徴は以下のとおりである。性別は男性 55%、女性 42%で男性がやや多く、年齢層は 50 代以上が 73%、職業の上位 3 位は定年退職者 23%、サービス業 14%、農林業 10%であった。また、居住地については旧鳥越村 37%、旧白峰村 20%、旧吉野谷村 19%、旧河内村 15%、旧尾口村 7%であった。家族構成は 2 人家族が 33%と最も多く、次いで 4 人 16%、6 人 15%であった。

若い世代が移住してくることへの賛否については、「賛成」68%、「やや賛成」14%であり、賛成派が 80%以上であることがわかる。賛否についての自由記述コメントを分析すると、「人口が増えることで地域が活性化する」と考えている意見が最も多かったが、次いで、「移住には賛成だが地域のしきたりや風習を理解せず、地域になじまない移住者は受け入れたくない」との意見が多かった。他方、実際に白山麓に移住した人々から、「地域内のコミュニケーションが多様で近所の人々が温かく、自身も満足しているので移住してきてほしい」という声があった。

若い世代の移住を促進するために必要な施設等については、「働く場」が 307 名、約 9 割と最も多く、次いで、スーパー (123 名、35%)、コンビニ (116 名、33%)、バス (116 名、33%) と続く。住民らが移住促進には消費の場と公共交通の充実がカギだと考えている事がわかる。なお、地域行事 (17%) と祭り (11%) を合わせると 3 割弱となり、移住の賛否に関するコメントで地域に溶け込める移住者を求める声が多かったことを考えると、地域行事や祭礼が人間関係を構築するのにつながると期待されているのではないかと示唆される。なお、自由記入のコメントをみると、住みよい環境を重視する声が多かった。

白山に移住してきてほしい人物像について、最も多かった答えは「地域行事に積極的な人」であり、196 名 (56%) の回答があった。次いで、「白山麓で働ける人」が 171 名 (49%)、「お年寄りに親切な人」120 名 (34%) が多かった。自由記述コメントでは、「コミュニケーションがとれる人」「地元になじめる人」を望む声が多く、次いで「常識的な人、取り決めに従う人」を望む声も多かった。これらの回答から、白山麓の住民は地域に溶け込める移住者を望んでいる事が明確である。加えて、地域行事への参加に積極的かどうかで地域に溶け込みやすい、あるいは地域に望ましい移住者だと判別可能だと認識している可能性が示唆される。

他方、移住者にアピールできる白山麓の魅力について尋ねたところ、「手取川や白山などの自然」が 261 人 (75%) と最も多く、次いで「人と人との触れ合い」が 161 人 (46%) であった。他方、「祭や行事」は選択肢の中では最も回答が少なく、43 人 (12%) のみであった。このことは、住民らがお互いの距離感に満足し誇りを感じている一方、好ましい移住者を見極めるカギとなる地域行事には強い魅力を感じていないことを示唆している。

最後に、白山麓への若者定住促進について自由に意見を記述してもらったところ、過疎の原因は生活環境にあるというコメントが複数あった。具体的には、電車やバスといった交通網の充実を望む声、除雪対策の充実を望む声、空き家の活用を望む声があった。

以上、白山麓住民への若者移住促進に関するアンケート結果から、ほとんどの住民は若者が白山麓に

移住してくることに賛成であるが、誰でもよいわけではなく、地域に溶け込める人を求めており、好ましい移住者を判別するには地域行事へ積極的に参加するかどうかがかぎとなることがわかる。ただし、住民の多くは地域行事や祭礼にあまり魅力を感じていないようであるので、移住促進と同時に行事や祭礼の魅力創出やアピール方法を検討していくことが重要だといえる。また、移住促進の背景にある過疎対策については、交通網の充実等の対策が求められている事がわかった。

4.4 都市部に生活拠点を置く若者への白山麓移住に関する意識調査の結果【堂下ゼミ】

金沢星稜大学経済学部3年生を対象としたアンケートの回答数は297であり、主な属性は男性67%、女性33%、石川県在住者が91%、家族構成は4人が33%、5人が24%、6人以上が30%であった。将来住みたい場所や住居等について尋ねたところ、「買い物に便利」な所がよいという声が最も多く161名（54%）、次いで「一戸建て」146名（49%）、「通勤通学に便利」145名（49%）、「地方都市」137名（46%）であった。これらをまとめると、金沢市内の大学生である回答者の多くは、地方都市に一戸建ての住居で、買い物や通勤通学に便利なところに住みたい、という希望をもっていることがわかる。

白山麓に移住したいと思うかどうかについては、「思わない」が140名、47%とほぼ半数を占め、さらに「やや思わない」と答えた回答者が74名（25%）であり、合計すると72%の回答者が移住の意思を有していないことがわかる。主な理由は、「不便だから」「田舎だから」「白山麓について知らない」「行ったことが無い」というものであった。他方、移住したいと「思う」「やや思う」と答えた少数派（5%）の意見としては、「自然環境がよさそう」「平和だから」「将来、子育てをするうえでのびのびとできそう」という声があった。

白山麓に移住するとした場合、どのような人がいてほしいかという問いには、「親切な人」という回答が213名（72%）と最も多く、「同世代の人」が162名（55%）で続く。その次に多かったのが「地域行事に積極的な人」で65名（22%）であった。地域住民へのアンケートでは「地域行事に積極的な人」が好ましい移住者を判別するカギになると示唆されたが、移住する若者にとっても住民らが地域行事に積極かどうか、好ましい隣人のいる地域であるかを判断するカギになるようであった。

白山麓に移住するとした場合、どのような施設が必要かについて、最も多かったのは「スーパー」で225名（76%）の回答があり、次いで「コンビニ」が221名（71%）であった。その他、「働く場」が176名（59%）、「飲食店」160名（54%）、「電車」151名（51%）、「バス」142名（48%）であった。これらの回答は若者が生活する環境において消費の場ならびに交通の利便性が重要だと考えていることを示している。なお、自由記述欄では、ガソリンスタンドが必要だというコメントが多く、交通手段として自家用車を想定していること、かつ自家用車で移動する際の利便性を求めていることが示唆された。

最後に、白山麓へのメッセージを依頼したところ、「自分のように白山麓について何も知らない人にどんどんアピールしていくのが良いと思う」「実際に定住してみた方の意見を聞きたい」「一緒に頑張っていきましょう」といった、白山麓に親しみを感じているのではと思われるコメントが複数あった。

5. 調査研究に基づく提言

調査結果に基づく提言は以下のとおりである。

- ・白山麓への観光に関して、多くのグループはマイカー・レンタカーで各観光地に訪れている。しかし、全体のうち、20%弱は、公共交通機関を利用して来訪しており、その観光客の観光地の立ち寄りの傾向は、車・バイク利用とは異なり、局所的なものである。近年の東海北陸道などの整備により高速を利用して遠方から車で来訪する観光客が増加し、観光も県境をまたいだものとなっている。一方、公共交通利用については、比較的狭い範囲での観光が行われていることを考えると、将来の北陸新幹線開業により、公共交通利用観光客が白山地域と他県とを一体的に回れるルートを策定するのが一振興策になるのではないだろうか。

- ・生活交通において住民の90%以上がコミュニティバス「めぐーる」を知っているにもかかわらず、利

用したことがある人は 13%に満たないことが分かった。「めぐーる」利用者の主な目的は、通院と買い物であり、それらを同時に済ます傾向があるため通院時間に合わせた運行時刻の設定が求められる。さらに鶴来駅まで直通になった場合、「めぐーる」の利用者の増加が見込まれる。また、「めぐーる」をデマンド化した場合、デマンドバスの予約方法の周知と事前の予約時間の改善など、利用者のニーズに合った運行形態が求められる。

- ・白山麓への移住について、地域住民の多くは肯定的であり移住者の受け入れを望んでいるが、金沢市内の大学生はほとんど白山麓への移住に興味が無い。しかし、大学生の回答者の多くが地方都市の一戸建てに住みたいという希望を持っており、買い物や通勤通学に便利な環境を望んでいる事を考えると、白山麓の生活環境を改善すれば石川県内の都市部から白山麓への移住を促進するのは不可能ではない。実際、少数ではあるが白山麓の移住を希望している大学生も存在する。交通に関していえば、若者にとっては公共交通ではなく自家用車での移動を想定すれば十分であり、利便性を高めるにはガソリンスタンドの適切な配置でよい。

- ・移住にともなう地域住民と移住者の人間関係の構築に関して、両者とも地域行事や祭礼への参加姿勢がお互いにとって望ましい人物かどうかを見極めるカギとなると考えていた。言い換えれば、地域行事や祭礼をうまく活用すれば、住民・移住者ともに望ましい隣人を得ることが可能になり、移住促進の実現性が増す。ただし、白山麓住民からみた地域の魅力の上位に行事や祭礼が入っていないことから、現在の地域行事や祭礼の新たな魅力創出、あるいは地域外へのアピール方法を検討することが重要となる。加えて、積極的に地域行事や祭礼に外部からの参加を受け入れていけば、将来の移住につながる可能性がある。

6. 調査研究の自己評価

高山・中山ゼミナールでは、観光交通、生活交通に関して、それぞれの側面から、白山麓地域の活性化のベースとなるデータを得ることができた。観光交通に関しては、観光客がどのような地域からどういった目的で白山麓地域を訪れ、どういった交通手段で各々の観光ルートを通っているのかが、昨年度に比べより鮮明なものとなった。今年度、はじめて焦点を当てた生活交通では、白山麓地域の住民の生活行動の大まかな部分を把握するとともに、過疎・高齢化が進んでいる地域の公共交通の問題点を再認識するきっかけとなった。今後、今回得られた分析データから、さらに詳細な部分を検証し、この地域における生活交通と観光交通の融合の可能性や、それぞれのルート提案、交通の結節点等の選定等に結び付けることによって、地域の活性化の一解決策を模索していきたいと考えている。

堂下ゼミナールでは白山麓への若者定住促進に関する調査研究を担当したが、この課題の背景にあるのは日本の多くの地域が抱える過疎化・高齢化であり、今回のアンケート調査だけで解決策が見いだせるような問題ではない。調査結果から、金沢市内の若者が地方での居住を望んでいる事、また白山麓住民・学生ともに地域行事や祭礼が移住促進にかかる新たなコミュニティでの人間関係構築のカギを握ることが示唆されたが、課題を提示した白山市をはじめ、白山麓の住民には満足いく結果ではないだろう。だが、調査においては郵送による回収にもかかわらず白山麓の住民の方から 350 の回答をいただき、また、金沢星稜大学の対象学生の約 80%からの回答を得ることができた。これらの貴重な回答内容を、調査研究に関わった学生は 2010-2011 年の年末年始にも各自で作業を続けて集計・分析し、上述の成果を得た。協力者・関係者の皆様をはじめ、白山麓の課題解決に少しは役に立つのではと希望を込めている。

連携枠全体として、両ゼミナール間での連絡は頻繁にとっており、連携を行うメリットは十分あったように思う。ただ、一つ残念だったことは、両ゼミナールで研究データの共有が図れていなかったことである。再び連携する機会があれば、この点について今後の課題として改善を図りたいと思う。